

◆リレー寄稿
今と未来の大学生を支援



大学生協東北事業連合
専務理事 三浦 貴司氏

全国のご支援に支えられて、ようやく震災から1年を迎えようとしています。温かい励ましに厚くお礼を申し上げます。

東北の大学生協では、全国大学生協連と協力しながら、親を亡くした学生や実家が全壊した学生、そして福島の原因被害を受けた学生など約2,100人に対して、お見舞金を贈る取り組みをしております。受け取った学生からは「大変だけど頑張って卒業します」等のお礼状が続々と寄せられています。

また、全国から大学生が集まり、沿岸部のボランティア活動も行なってきました。昨年4月から今年2月まで19回、のべ700人が参加しています。泥かきから始まった活動でしたが、今では小中高生の学習支援をしています。未来の大学生が進学をあきらめることなく学んでいけるよう、今後も支援を行なっていきたいと思っています。

2,000枚の「ひなまつりカード」に思いをこめて

いわて生協では、沿岸被災地仮設住宅で個人宅配を利用されている方へ「ひなまつりカード」を贈る取り組みを行いました。

カードは、主に内陸部のいわて生協の組合員が制作したもので、作り方やサイズを紹介したチラシを宅配のカatalogと一緒に配布し、カードの制作を呼び掛けました。その結果、寄せられたカードは約2,000枚。見本のものに加え、オリジナル作品も多数あり、一つひとつのカードに思いがこもっていることが分かります。最後に、カードにいわて生協からのメッセージをはさみこみ、2月20日から順次届けられました。また、22日に、大船渡市リアスホールで行なわれた「南こうせつ被災地支援コンサート」(主催いわて生協けんコープ)の会場でもカードが配布され、お礼の電話をいただくほど喜ばれる取り組みとなりました。



材料は各自準備。十人十色のおひなさまが完成。



「南こうせつ被災地支援コンサート」。けんコープ組合員が南さんと記念撮影。

<ひと>

「仲間が増えたことは、
財産です」



みやぎ生協役員室広報担当
係長 本間賢二氏



本間さんの実家より臨む気仙沼の様子。(2012年2月13日撮影)

本間さんは、みやぎ生協の広報担当として、この1年、みやぎ生協の復興支援活動取材し、間近で見えました。本間さんの取材は撮影だけでなく、一緒に作業も手伝うというスタイル。その理由を聞くと、

「せっかく被災地に入らせていただいているのに、取材だけでは申し訳ないですし、何か自分も力になればという気持ちがあります」

震災により、本間さんの実家がある気仙沼や、お母様の実家があり思い出深い町である志津川も被害を受け、本間さん自身も親戚やたくさんの方の友人・知人を亡くしました。「最初は、将来像が見えずに不安ばかりでした。取材に行っても、答えてくださる方も少なく。しかし、だんだん被災地の方の表情も明るくなってきて、今は復興のスピードが思った以上に早いことに驚いています。継続して取材に入っている志津川のカキ養殖施設では、その復興の様子を間近で見ることができ、感慨深いですね」

本間さんはこの1年を「助け合いを実感できた1年」と表現します。

「同じ目的で、同じ作業をする。そこでできた仲間たちとの縁を、これから先もずっと大切にしたいです」

【一言メッセージ】

- ・ いろいろな人と交流することがストレスになる人もいます。外に出てくるのが嫌という人は、なぜそう思っているのかを知り、どういった形の支援ができるかを考えなければいけません。(福島・Sさん)